

#### 4) 知的障害者と避難所生活

自閉症の人などはこだわりが強く、避難所で過ごすのが難しかったと聞いた。自宅に戻った人も、障害のある子どもを家においては配給に並ぶことができず、何も食べないで過ごした人もいたようだ。私たちも、家族で自宅に戻った後、支援物資を受け取りに行っても、同行できない息子の分はもらえなかったことがあった。

今回は偶然、通所にいるときに被災し、施設そのものは直接被災しなかった。だから面倒を看てくれたが、そうではない状況で被災しても、障害者だけでも集まれる避難所があるといい。仮設住宅についても、「障害者がいて隣に騒音などの迷惑をかけるので仮設住宅には入れない」という声が出て、市内に障害者用の仮設住宅が建てられた。

また、連絡方法や連絡網も大切。今回、全日本育成会が会員の安否確認を行ってくれたが、自分たちだけでは何もできない状態だった。

#### 5) そのほか

夜など一緒にいるときに被災したら、子どもをどう助けるかは不安。息子は歩けるが、4月の余震の時には固まって動かなくなった。パニックになったりしたらどうしようと思う。息子は、いまでも少し揺れるだけで「地震だよ」と言う。

震災前後で息子の様子は変わった。落ち着かない時期もあったが、がれきの上で遊んだり、普段とは違う街の様子を探検してみたり。意外と順応性があった。

育成会のような組織は、やはりなければ困る。被災して困っている時に助けてくれる部分もある。

## 6. 宮城・山元町／親の会

ヒアリング実施日：2012年8月7日

参加者：6名（母親の立場）

子どもの障害種別：発達障害、知的障害、脳性まひ、自閉症、肢体不自由

子どもの年齢：学齢～成人

### 概要

津波被害を体験した、障害児者の母親6名にグループヒアリングを行った。震災直後の状況から、現在の避難生活に至るまでを自由に会話してもらった。

障害児者と別々の場所で被災した場合、出会うまでの困難が語られた。また、避難時における配給方法の違いによる差異（待遇の良し悪し）と、それへの不満が多く語られた。

障害児者には被災後に様子の変化があり、被災体験を障害児者なりに解釈し体験智として蓄積している状況がうかがえた。

緊急時を支えたネットワークは、家族・親族が中心であり、その後の物資のやりとりなどで友人や近隣、医療機関などへの連携等のめんで専門職という順になっていた。

### 1) 発災時

①障害児者：学校か作業所にいた。

②親：職場にいた…波が見えた。

家にいた…高台なので警報が入っても気にしなかったが、近所の人に言われて逃げた。  
外出先にいた…子どもが心配で急いで家に戻った。

### 2) 情報入手

携帯は通じなかった。

消防等の巡回車で大津波警報を知った。

### 3) 避難時

①その日のうちに、子どもと一緒に逃げた

・子どもは寄宿舎で待機していたので迎えに行った。

・小学校に健常児を迎えに行ったあと施設（送迎バスが来ないので）に障害者を迎えに行った。

②子どもと別々に逃げた

- ・子どもと合流したのは2日後（その間、作業所に宿泊）。
- ・職場から帰れず1週間いた。子どもは別地域のグループホームで無事だった。

#### 4) 避難先

##### ①避難所など

- ・子どもの表情が一変した（笑わない・食べない）。
- ・役場がいっぱいで、車の中で1週間過ごした。
- ・寒さで子どもが熱をだしお腹を壊した。
- ・一か月経ってから避難所に行った。
- ・部落でまとまっていたので、仮設に移るときに嫌だった。
- ・公民館などでは障害児を特別扱いしてもらえず、うるさいと言われた。

##### ②家族・親族

- ・実家に1週間行った。

##### ③自宅

- ・自宅の被害はなかったため、親族を大勢受け入れた。
- ・へどろをかき出して自宅で過ごした。

#### 5) 物資の調達

##### ①直後・自宅避難

- ・実家から灯油や野菜をもらった。
- ・お米は自宅に用意してあったストックがあった。
- ・近所の人から野菜を分けてくれた。
- ・ガソリンや食料は、他地域にいる子どもが車で運んで来てくれた。
- ・山に湧水を汲みに行った。井戸水を使った。
- ・女性用品・トイレトペーパー・紙おむつは配給

##### ②避難所

- ・場所によって配給方法が異なった。
- ・カップ麺が多かったところ、業者から食事が来るところ
- ・どこでいつ何がもらえるという情報伝達が悪かった。たらい回しに遭った。
- ・子連れでたらい回しに遭うのはつらい。
- ・役所・業者も人によって対応が異なる（家屋損壊判定の場所・もらえる旗）。
- ・防災の班は事前にあったが、連絡方法がなくて機能しなかった。配給は区長が気が利く人だとうまく回っていた。

#### 6) 生活再建

- ・アパートを借りて数か月いた。

- ・4月末頃、水が出てから生活が少し落ち着いた。

#### 7) 障害児者の様子

- ・震災1年後くらいから、地震のときのことを話し始め（亡くなった友人のこと）、学校に行かないと言うようになった。
- ・子どもが好きなので、避難所で小さい子がいると喜んでいた。
- ・大嫌いだったご飯をちゃんと食べるようになった。

#### 8) 事前にやっておけばよかったこと、今心がけていること

- ・防災用品（ろうそく・懐中電灯・乾電池・着替え・乾パン・水等）の準備。
- ・ガソリンは半分になったら入れに行く。
- ・電気を使わないストーブを用意

#### 9) 一番頼りになった人・有難いと思った人

##### ①家族・親族

お父さん、実家のお嫁さん、甥っ子（掃除・物品の調達）

##### ②近隣

周りの友達、近所の人（食料・水の分け合い）

##### ③専門職

療育関係の所長（病院を紹介してくれた）

給水車の運転手（危険区域なのに入ってきてくれた）

## 7. 福島・檜葉町／相談支援員・親の会

ヒアリング実施日：2012年8月30日

参加者：2名（相談支援員1名・知的障害児の母親1名）

子どもの障害種別：知的障害

子どもの年齢：学齢

### 概要

原発による避難を体験した、相談支援専門員と、親の会会長に、サービス利用や地域の課題について話をしてもらった。

広域避難によるサービスの受容と供給のアンバランスの問題、単年度事業による見通しのなさなどの問題と、サービスを利用する側の意識の問題、親の会ネットワークのもつ意味などが浮かび上がった。

#### (1) 福祉サービス利用時の課題

・新しい避難所で、自身の努力で、サービス利用のために事業所を直接訪ねて行って、「何とか使わせてください」と自分で聞いて入ったという方がたくさんいます。本当に、その辺が有事のときの課題だと思います。

・うちの子供は浪江町の施設を利用していました。その夜は送ってきてもらいましたが、そのあとは、地域ごとに避難先が違います。浪江町は、二本松市とか、福島のある方面に避難しました。そして、だいぶたってから、その施設の職員から、「元気ですか」と電話をもらって、今の状況についてやり取りしただけです。だけど、「今まで行っていた施設が、電話たった1本？」と、私は、その施設の対応に個人的にクエスチョンが付いてしまいました。「私たちの施設は、今、ここに来て、こうですけど、もし近くだったら来られますか」とか、そういうのがあってもよかったのではないかといいました。避難先がそれぞれ違ってしまったのはしょうがないけれども、「元気ですか」という電話を施設からもらったのは、本当に1カ月ぐらいたってからです。そのくらいの間は、みんなそれぞれが自分のことで精いっぱいだからというのはわかりますが、正直、「うーん」というところがありました。

・自分たちは、檜葉町から来た方たちの支援と、入所施設ではありませんが、いわき市のグループホームに住んでいる二十数名の支援に一応入りました。スタッフも避難しているし、家族がいる方は、やはりそっち優先で帰った方もいたので、スタッフが激減しました。入所施設やグループホームに直接かかわっている方を支えるところでいっばいで、正直なところ、通所している方は、家族の方に送り届けるまでしか、なかなか対応できませんで

した。申し訳ありませんでしたが、本当に、そこは電話連絡ぐらいしかできない状況でした。

それでも、家族の方が避難先に来たり、近くに来るときは、時々会っていました。8町村の行政機能が本当にばらばらに避難したので、あそこに行けば必ずいるという状況ではなくて、二本松市だったり、郡山市だったり、川内町だったり、いろいろなところに避難していました。(リハ・アクティヴセンター) TAIYOとか、浪江町の事業者は、二本松市のほうだと思うので、本当に混乱した中で、障害がある方はどこの支援という、家族とか、行動を共にしている方への細やかな支援は、本当に足りない状況でした。

## (2) 虐待状況の防止のための親の会ネットワーク

・親の会の方々に、あとで連絡を取り合って状況を聞いたら、やはり避難所にはいられないということで、車の中で一晩、二晩。親戚のうちに行った方がいいが、親戚のところでも迷惑が掛かるので、結局、空いている民間のアパートに事情を説明し、早急に借りて、そこでずっと生活をしているという方もいました。また、入所していた施設が避難しなくてはいけなくなり、家族と合流して、また別のところに避難したけれども、やはりいられないので、自分でその地域のそういったところに入れてもらった方もいました。

特に、虐待ではありませんが、今まで離れていたのが来て一緒になると、両方にストレスがあります。そうなって困っている方もいました。あとから連絡を取り合って、そういった状況を聞いたときは、親の会の会長として「ああ、頼りないな。情けないな」と感じました。地元にいれば、町で会ったら、「元気？何をやっているの？」と話もできたし、助けることもできたけれども、離れてしまっているのでできません。「あの子はどこに行っているんだろう。大丈夫だろうか」と考えても、助けてあげられないのが情けないと思いました。

だから、そこで仲間と一緒に、みんなでどこかへ行くとか、行動できるような態勢があってもいいと思います。本当に、それこそネットワーク。私たちは、地元で親の会という活動をしているけれども、その会としても、今後のために、そういうのも一つ考えていかななくてはいけないことだと思いました。

・障害がある人がいるということは、生活の立て直しをしていくときに、考えなければいけない要因が増えるということなので、その分のストレスをやはりどこかで減らしてあげないといけません。障害がない人たちが大変な分より、楽になろうという要求ではありません。障害があるが故のプラス・アルファをどういうふうにしてカバーしていくかという話になると思います。

・そういった中で、やはり何か手助けできるような状況を作っておかなくてはなりません。本当にライフラインが全部止まってしまって、携帯も全然出ないときに、連絡が取れなかったじゃないですか。だから、いざというときの緊急のそういうものも考えます。あとは、行った先々で、どこに何があるというのも、個人のレベルでは無理かもしれないけれども、で

きる範囲で情報を入れておくのも親の務めです。

私は檜葉町だけでも、いわき市に行ったら、いわき市の法人は、こことこことこがあるとか、会津に行けば、ここがあると、家族単位でもいいので、自分自身の情報として入れておくことが必要ではないかと思いました。

・私の場合、町同士が姉妹都市だったので、会津美里町に避難させてもらいましたが、県の育成会の支援で、避難していた先の会津美里町の（手をつなぐ）親の会の会長が、わざわざ避難所に来てくれたのです。県のほうで、双葉郡の親の会の方たちを調べたみたいです。檜葉町の私たちが会津美里町のここにいるのを調べて、わざわざ訪ねてきてくれ、会津美里町で施設に行く段取りをやってもらいました。会津美里町の親の会の会長とは、会ったこともありません。それなのに来てくれて、その方がかかわっている法人の施設に通うことができました。ありがたかったです。そうでなければ、本当に避難所で、ぼーっとしているし、ホテルに移らせてもらっても、ぼーっとテレビを見ているしかありませんでした。

・県の育成会では私たちを探したいけれども、いわゆる役所の窓口としては、それを一切教えてくれなかったとかね。だから、独自のネットワークを作らなければだめだと言っていました。

## (2) 避難所での居場所のなさ

・どこかに通うところがないと、本人が一番つらいです。うちの場合で言うと、ホテルに避難させてもらっていましたが、ホテルも営業したいじゃありませんか。私たちは、そこに200人くらいいましたが、一般のお客様を呼び込みたいのです。県からの依頼で受け入れたはいいいけれども、一般のお客様が来るときには、私たちは邪魔です。だから、そこで子どもたちの運動が制限されたり、私たち自身も喫煙場所が本当に隅っこのほうに追いやられたりということもありました。

子どもも運動を制限されるし、本当にやることなく、部屋から出ずにいました。でも、そんなとき、うちは来てもらえたので、すぐに作業所に通えました。

## (3) 資源とのタイミングの良いつながり

・こっちへ戻ってきたら、今度は相談支援員が来てくれたでしょう。うちの場合で言うと、タイミングがよかったです。

本来ならば、そうやってタイミングよくなるようにネットワークができていればいいということです。老人のほうは、それぞれの町の社協がカバーするからいいと思います。われわれ障害児・者のほうは、とりあえず社協も目をかけてくれるけれども、重要なポイントが違うでしょう。

## (4) 仮設住宅での配慮

・自閉の子たちとか、常時的に落ち着かない子どもたちは、土台がしっかりしたところがないと、同じ仮設でもきついですね。その辺は、障害別の優先順位があってもいいと思いました。

・子供がいたおかげで、ホテルにも優先的に入れたと思います。私らが今いる仮設は、ペットOKの仮設で、ちょっと特別な仮設です。そこにも、すんなり入れました。ですから、障害者とか、老人とか、小学生の子どもがいる家族は、できた順に優先的に仮設に入らせてもらえました。

## (5) 相談支援員としての活動

### ①現在

・今は、訪問活動といった相談支援を主にやっています。障害のある方が、ここに暮らしていてという、もともとの地域性が全くなくなって、新しい中で、自分もいわき市に初めて来て、社会から孤立している人や、困難なところを家族だけで踏ん張っている方を地域や人につなげて、そこで本当に……。もちろん、仮設の中でも、こういうコミュニティーがあるかもしれないけれども、いわき市の福祉サービスとかにつなげていければと思います。

でも、訪問すると、つながっていない方がいて、自分たちがここにいることを誰も知らないという疎外感や孤立感で、元気がない方が結構たくさんいます。逆に、1人で暮らしていても、訪問活動に、「ああ、大丈夫だよ」とか、「何でこういうふうに通ってくるんだ」と言う方もいます。1年半たって、それぞれの状況になってきている中で、その辺の難しさを感じながら……。

今、皆さんの話を聞いていて、自分も再確認しました。基本は、「本当におせっかいかもしれないんですけど、皆さんを探していたんです」という気持ちを自分たちがいつまで持ち続けていけるかを常に再確認しながらでないと、自分も心が折れてしまいます。

地元の相談員や社会福祉の現場にかかわる方のメンタル的な部分も、すごく大事だと思います。その辺がしっかりしないと、もちろん、いい仕事もできないし、障害がある方とかかわりの中で、スピードが遅れてしまったり、早急な対応ができない部分があります。そういったことは、この1年、自分も感じています。

県外から来てくれた応援のケースワーカーに助けてもらったり、専門家にいろいろ助言してもらうことが、本当にエネルギーになっているのを感じました。

### ②被災時

・結いの里の地域活動支援センターにいて被災しました。そこで、ちょうど送迎の前に地震が起きて、みんなと一緒に机の下に隠れました。とりあえず揺れが収まってからは、りんべるハウスのみんなと一緒に中庭に避難しました。ちょっと落ち着いてきてからは、電気も通じていましたし、職員が集まってきました。そうしたら、津波で防災無線が鳴り始めました。自分は町の消防団に所属していたので、消防団の招集がかかりました。施設長から、行けという命令があったので、津波の誘導のために現場を離れました。ですから、



自分は、消防団活動を3日間ずっとしていて、時々、皆さんのところを見に行きました。

翌日、原発で第一次避難のサイレンが鳴りました。あのときは10時くらいでしたか。そのときは、一度皆さんのところに戻り、自宅に戻っていた利用者を迎えに行ったりといった活動をしました。ですから、現場を離れたり、戻ったりでした。

そのあとは、消防団活動をしていました。そして、消防団と一緒にいわき市の小学校に避難して、そこでは水くみといった活動をしていました。

自分が法人本部と合流したのは、10日を過ぎる頃です。その頃には、先ほどの地域生活支援センター利用者の皆さんとか、職員の方々は法人本部に合流していて、そこで再会しました。そこからは、ずっと一緒に活動しています。

・役場職員と一緒に動くときもあったので、本当に混乱している役場の状況も手に取るようにわかりました。住民に聞かれても、職員も答えられませんでした。

・家族と離れ、家にも戻らず、家族にも会わず、電話での連絡も取れない中、町民のそういったのに携わっているのは、見ていてもとても大変そうでした。女性の職員も、自分たちより、まず同じ町民を優先的にやっていたから大変だったと思います。本当は、お互いにみんな一緒ですが、町民としては、やはり職員に、「何でないの」、「どうするの」、「こうなの」と言ってしまいます。でも、聞いても職員にもわかりません。

## (6) 今後の見通し

### ①住民として

・住民は、自己中のわがままばかり言っていればよかったです。だけど、どうでしょう。家族は家族単位で防災意識も高まっただろうし、それぞれに大きな問題を残してくれました。地域全体には、負の遺産を残す結果になってしまったし。

だから、今日の今を楽しんでいこうとしか思えません。明日までは考えません。とりあえず、会話の中では、「じゃあ、明日はどこへ行ってみようか」と話しますが、今までみたいに夢があつての先のことはありません。夢も何もありません。今日を楽しく生きて、おいしいものを食べて、楽しく生きればという状況に追い込まれた今回の震災です。でも、1日でも1年でも長生きしてやるみたいなの、すさまじい根性がだんだん強くなってきました。わが町福島がどう変わるのか見届けてやるみたいなの。とりあえず、町がどうなるのか見届けないうちは、病気にもなれないみたいなの。そういう面では強くなりました。

・いわきの地で、こうやって今もお世話になっているけれども、先ほども言ったように、いわき市は地元より広いじゃないですか。施設も選択肢がいっぱいあるので、「ここがだめだったら、じゃあ、別な場所」ということで、相談支援員に「だめだったから別のところを探してよ。紹介してよ」と言えます。だから、ここでの今の生活は、本当に楽しいところが多いです。

うちも、この状況になって、いわき市に来てから、ショートステイとか日中自立支援のサービスを改めて利用するようになりました。してみたのです。今までは家族だけだった

じゃないですか。いろいろなところでつながっていけば、娘だけでも助けてもらえると思いました。いろんな方々といろんなところで交流を持ってもらえれば、今行っている施設が、「早くこっちへおいでよ」と言ってくれるかもしれません。それを望んで、今、いろいろなサービスを利用しています。

それまでは、正直な話、私やほかのきょうだいが元気なうちは、地域のどこへ行っても、この子は大丈夫だという甘ったれの気持ちもありました。「そういうサービスは、まだまだ必要ないかな。入所しなくても大丈夫かな」と思っていたけれども、そうではないと改めて思って、今、新しいサービスをどんどん利用しています。

## ②支援者として

・檜葉町は、10日に区分が変わったじゃないですか。それで、回りました。復興に向けて多少は進んでいるかもしれませんが、自分としては、あまり先のことを考え過ぎると、見通しがなかなか難しいです。いわき市には、檜葉町や双葉郡の方がたくさん住んでいます。ゆくゆくは檜葉町に戻る方も出てくるかもしれませんが、今は、いわき市で、いかに楽しく、生きづらさを減らしながら暮らせるかに集中していくしかありません。開き直りかもしれませんが、そう感じています。先のことを考えるとだめです。

・サービスを提供する側の環境変化としては、本音で言うと、今は、こういう状況だから、いわき市でしかできないことをやろうとか、新しいサービスを使おうとか、檜葉町ではできなかった一人暮らしをいわき市でやろうという前向きな気持ちで、相談員もいきいたいところです。しかし、実際、家族の状況も違うし、逆に、自分たちで今までやってきたからやりたいけれども、環境が変わってなかなかできないというジレンマを抱えて、ふさぎ込んでしまっている家族もいます。

また、使いたくても、サービスによっては足りていないサービスも出てきています。特に児童系のサービスは、もともといわき市のお子さんの需要を抱える枠も少ない中で、今、2万人から2万5千人ぐらいの避難者が来ていることで、その被災者の受け入れもやっけて、療育の事業所が不足しています。

さらに、グループホームも不足していますし、いわき市はアパートもなかなかありません。だから、一人暮らししたい、退院したいという方にとっては、グループホームは全然空いていないし、アパートもなかなかないという状況です。

そういういわき市ならではの、避難者が集中している部分で、それにこたえる行政側の資源の準備が、まだ追いついていません。そこで、要望とサービスをどう調整していくかが、相談員は非常に難しいです。しかも、4月からはサービス等利用計画・障害児支援利用計画の相談が入ってきました。ちょうどそれも大変な状況になっていて、相談員は……。

自分は、計画相談とかは、まだ対応していないのであれですけれども、実際にそこをしている相談員は、今は大変な状況だと思います。3年かけてというところだと思います。

・緊急的な対応かもしれませんが、被災した方に対応する基盤整備事業として、今年度、自分が部署を移った相談員の立場の相談支援充実・強化事業の委託が、福島県の7圏域に相談支援事業所を持っている法人に掛かりました。被災者への相談員を増員しよう、地域の資源につなげていこうという事業が、単年度事業で今年1年動いています。

ですから、着地の相談員を増員して、ある圏域で本当にたくさん増えた障害がある方や被災者の対応と福祉相談を来年度以降どうしていくかという検討も、今、とても必要なところ です。

特に、発達障害児童の受け皿として、日中活動の場所が始まりました。いわき市でも「ゆいまーる」と「セカンドハウスわくわく」という事業者がやっていますが、そこも単年度事業です。今年は、障害があるお子さんを12名ほど受け入れて療育をしています。単年度だから、来年度はどうしようという悩ましい課題も抱えています。資源は作っていきたいのですが、いわき市としての考えもあるし、避難8町村の考えもあるしというところで、なかなか難しい部分があります。

・避難生活には本当にいろいろなかたちがあって、仮設住宅とか、借り上げアパートとか、親戚のところにいるとか、皆さん新しい環境で生活しています。

福祉の立場と相談員の立場として寄り添うときに、生活環境が変わって、日々、ストレスの中に暮らしている方に本当に寄り添う存在というか、前は、地域がインフォーマルの部分で支えていた部分、例えば、新しい環境が調うところにつなげていくまで寄り添う……。相談員とは言いませんが、そういうサポートをする方たちは本当に必要です。家族で元気を取り戻して、地域につながってというところが理想です。

そこまでつなげる、寄り添って課題を一緒に解決していくのは、相談員でも、隣のおばさんでも、隣のおじさんでも誰でもいいと思いますが、その存在が、被災している方、避難者には、まだまだ足りないと思います。自分たちとしては、そういった存在になれる相談員、そういう相談態勢を取りたいと思っているので、理屈ではない、そういった支援ができる相談員が檜葉町にもっと増えればと感じています。それは、自分の今の切実な思いです。

・自分たちが全部やるのではなくて、地域の保健師だったり、もちろん外からの応援だったり、いろいろな人との連携でできると思います。それをうまくつなげていける、コーディネートできる仕組みをもっと作る必要があります。また、地元がそれで育って、県からの応援をもらって、檜葉町の人間が頑張っていかなければいけません。そのためのいろいろな仕組み作りというか、連携……。連携と言えば簡単ですけども、それをつなげていくのが大事です。

### ③自立支援協議会の活用

・今年度始まった双葉地方の（双葉地方地域）自立支援協議会のほうで何か仕掛けられないかと思います。双葉郡としても、今のいわき市におんぶに抱っここの状況ではなくて、双

葉郡としても考えて、いわき市と議論して、いわき市に何か拠点を作って、例えば、その拠点は、双葉郡の方だけではなくて、いわき市の方も使えるかたちにして……。

いわき市と双葉郡は、縦割り行政で、なかなか連携がうまくいっていないみたいです。だから、そこをうまくして……。「仮の町」構想もありますし、双葉郡は、当分いわき市での生活が続くと自分は感じているので、そこは、ちょっと風通しをよくしていくきっかけを自立支援協議会で何か仕掛けていけたらと思っています。

・圏内外ばらばらの地域なので、まず何からかというのは、本当に皆さんが考えているところです。まずは、研修などを通じて皆さんが集まる機会を作るところから始めて、具体的に一つだけでも何かかたちを作って……。派遣型相談支援センターの構想もありますが、そういったもので、何か双葉郡として復興の福祉の基盤というか、きっかけになればという話をしています。

・地域の福祉マップ作りも、別に地元の人が頑張らなくても、どこかからお金を取って何人か来てくれて、その人たちに聞き回ってもらえたら……。自立支援協議会では、地域福祉マップを一度作ったのですよね。

・今まであった基盤の上に、いわば移民としての対応で加えて行って、抜けてもOK、入ってもOKというかたちにしていけば、ニーズへの対応ができるような気がします。

## 8. 福島・檜葉町／当事者、地域生活支援センター・作業所職員

ヒアリング実施日：2012年8月30日

参加者：7名（施設職員2名：うち1名は知的障害者の母親、精神障害者4名（男性2名・女性2名）、知的障害児の母親1名）

子どもの障害種別：知的障害

子どもの年齢：学齢、成人

### 概要

原発による避難を体験した、精神障害のある当事者と、その支援者（檜葉町にある地域生活支援センターまたは作業所の職員）、檜葉町親の会の母親にグループヒアリングを行った。震災直後の状況から、現在の避難生活に至るまでを自由に会話してもらった。

精神障害のある本人は、薬の調達が大きな課題であったことが分かる。また、親であり施設職員でもある人は、利用者と自分の家族とで避難していた。さまざまな避難の仕方があったが、情報の伝達・連携と資源調整がとても重要であることが、全体から見て取れる。

### 1) 発災時

①障害者と支援者：作業所にいた。自宅にいた。

・地震ががたがたと来て、椅子に潜り込みました。なかなかやまなかつたので、今度は広場に出ました。そして、表へ出てはまだ揺れがやまなくて、今度は、みんなで集まって、地域生活支援センター（作業所の向かい）のほうに移動しました。そのときは、もう立ってられなくて、皆さんで地面に丸く輪になっていました。利用者は、みんなそれぞれ毛布をかぶったり、ジャンパーとかあるものを出して全部羽織って、とにかく暖かくしました。怖くて中には入れませんでした。車が外にあったので、とりあえず皆さんで車に乗ろうということで、車の中で待機していました。あのときは、かなり寒かったです。急に寒くなりました。あの日は、雪もちょっと降ってきました。しばらくしてから、建物の中に入りました。

・作業所の喫茶室でたばこを吸っていました。火を消して外に出ました。地面に手をつけてしゃがんでいるのが精いっぱいでした。そのあと、車に入ったりジャンパーを着たりして寒さをしのいでいました。

・自宅で母と一緒にいました。地震のあとは、自宅の片づけなどをしていました。

・自宅で仕事をしていました（職人）。地震が来たので、ラジオを聞いていると、原発の

ことがあったということでしたが、たいしたことないと思っていました。

②障害児：通所施設にいた

・施設と連絡が取れず、迎えにいこうとしたが道路が陥没しており断念しました。家で待機していたところ、9時過ぎに施設から送ってきてもらいました。

③親・支援者：職場にいた。買い物をしていた。

・子供たちは、たまたま学校が休みで、2人ともいました。そのときは、ちょうど電話がつながって、車を持っているから、「地域生活支援センターにすぐ来て」と言いました。そのあとに、だんなからも電話が来ました。一番下の子が障害を持っていて、ちょうど地震があったときは、たまたま養護学校の送迎で預かりがあつて、私は、そこに迎えに行く時間帯でした。そこで待っていた状態でバスが来ました。バスが到着する前に揺れが始まって、子どもたちはバスの中にいました。そこで、迎えに来た人たちと役場の職員が、どーっとなって出てきました。バスの揺れている姿を見て、普通の子だったら泣いていますよね。運転手と介助の方のほうに腰が立たなかったと。役場の人たちと、そこで降ろすかどうかということになりましたが、ちょっと待とうということで、揺れを見ていました。そのあと、バスが走ってきたら、子どもたちは楽しみながら降りてきました。「障害者の子どもでよかったね」という、みんなの一言が……。ジェットコースター気分で、にこやかに降りてきてくれたので、すごく……。そこで、うちの娘を連れて帰ろうと思ったら、「嫌だ。乗らない」と。のびっこランドに預かりを頼んだので、そちらに行くということで、ちょっと回って結いの里に連れていくからと頼みました。そして、預かりの子を連れて結いの里に行って、車の中でお母さんが迎えに来るのを待っていた状態でしたが、みんな寒くて、車の中で震えが来ていました。

そのあと、「これは困った。店が開く前に食料を買いだめに行かない」と思いました。水が出なくなってしまったので、何か飲ませないといけないということで、水とか食料とか、あるものを買出しに行きました。そのあとは、もう津波が来たということで、ちょうど高台で海が見えたので、上から少し見ていました。

・友達と2人で買い物をしていましたが、そこから一旦は家に……。うちに帰るにも、今度は道路が陥没しているわけです。ようやく家に帰ったら、相当な状態になっていました。帰ってきたときは、まだ水は出ていましたが、水が出なくなると思ったので、すぐタンクに水をくみました。その直後に水が出なくなりました。その当日は、大丈夫だろうと思っていました。まさか原発がこうなるとは思わないので、停電も2、3日で回復し、ガスも大丈夫になり、水もすぐに出るだろうと思って、買ってあった食材を食べながら、そこにいました。やはり12日に町内放送で避難の指示が出たので、私たちも同じルートで5時間、6時間かかって草野のマルトの駐車場にたどり着きました。でも、案の定、草野小学校はもういっぱいでした。私たちは、中央台南と言われましたが、たまたま間違っただけで北小でした。

## 2) 情報入手

- ・NHKのラジオ
- ・防災無線

## 3) 避難時

### ①親と一緒に逃げた

・1日くらい経ってから、父と兄と私で、茨城県の親戚のところに避難しました。道路が壊れていて回り道をしたので、2時間くらいかかりました。

### ②子供・利用者と一緒に逃げた

・次の日、マイクの放送で、「避難しなさい」と。だけど、うちの車には、たまたまガソリンがありませんでした。金曜日の帰りに入れようと思っていたので、「ガソリンがない。どうしよう」と言って、下を見たら、ちょうど人がいました。それで、「ガソリンはありますか」と言ったら、「今、鍵を開けに来るから、ちょっと待ってろ」と言われました。そして、開けたと言われたので、すっ飛んで行きました。利用者をうちの車ともう一人の職員の車に乗せて、あとは、利用者の車と、うちの家族の車の4台で、ガソリンを満タンにして行きました。だけど、出したときには、もう渋滞で車が動きませんでした。みんながガソリンを入れに来ました。たまたま私たちは早かったから出ましたけれども、ざーっと並んですごかったです。(国道)6号線に出るにも出られなくて、結構かかりました。そのときは夕方、利用者は食べないといられない人たちなので、ちょうど作ったラスクを持ち出して、あるものを全部持って、毛布も持って、そのあと、今度は草野に避難しました。5、6時間かかって、草野まで移動しました。そのあと、マルトが開いているということで、草野のマルトに行ったら、バナナとか果物がほとんどありませんでした。とりあえず、甘いお菓子があったから、それを買ったり、あるものを買って移動しましたけれども、うちのだんなから電話が来て、「草野小学校は、もういっぱいだめみたいだよ。だから、中央台に行きなさい」と言われました。でも、中央台への道が全然わかりませんでした。「中央台の南小(学校)って、どこにあるの?」ということで、カーナビを設定しました。うちの3台と、たまたまそこに近所の人たちがいたので、「くっついておいで」ということで、5、6台をつなげて中央台南小まで連れていきました。

### ③支援者と一緒に逃げた

・グループホームは、新しく造ったばかりで耐震もよかったので、帰れない利用者は、そこに避難しました。私たち職員はみんな残りました。グループホームは、停電がありませんでした。電気が来ていました。なので、暖房もついたし、テレビもついたし、ご飯も炊けました。出なかったのは水だけです。でも、周りの皆さんは、体育館のほうに避難しました。グループホームは、ほとんど私たちだけでした。夜になっても周りに誰もいなかったもので、ちょっと不安でした。職員の家族もグループホームに来て夜を過ごしました。

- ・職員2人と、うちの家族とだんなさんと、グループホームの人と、電車が動かなくて帰

れなかった人と、10人ぐらいいましたが、その人たちで一晩過ごしました。

・一人暮らしなので、いったんグループホームに避難して、夜の8時か9時に、地域生活支援センターの理事の車で自宅に送ってもらいました。

#### ④自分一人で逃げた

・翌日の朝3時くらいに出かけて、原発を見に行ってきました。戻ったのは9時くらいだったと思います。そのうちに、原発の水が供給できないとラジオで言い始めたので、助かるかなと思っていました。車検が切れた自分の車があって、エンジンをかけてみたらかかりました。そのうち助かるかなと思って、夜5時か6時に2回目の天皇陛下の玉音放送があって、国だの東電に代わって、遠回しにわびていました。これは大変だと思って、猫1匹と犬2匹を連れて、私と3匹で、キャットフードをあるだけとドッグフードを1袋持って、20リットル缶に満タンに入ったガソリンを持って出かけました。検問に3、4回引っ掛かりました。それで、「車検がないんだけど」と言ったら、「本当に車検がないのか」と何回も聞かれて。でも、「ええっちゃ」と入れてもらえました。

・防災無線で「南のほうに避難してください」と言われました。自分は、車も何もないので歩いて、とにかく南のほうに行きました。みんなが避難する車が道路をだんだん通っていきました。その中の1人が止まってくれて、「乗っていきな」と言ってくれたので、乗せてもらい、小学校の体育館に行きました。

### 4) 避難先

#### ①避難所など

・いわき市の体育館には3週間くらい居ました。そのあとは、楡葉町の人みんな会津に行く聞いていたので、行かなければならないのかと思いました。そして、大型バスで会津美里町に行って、美里町の町営体育館にしばらくいました。雪もまだ残っていて、寒いのが一番大変でした。たくさんの人と一緒に生活するのは、本来は一人暮らしなので、プライベートが確保できないのがちょっと大変でした。

・最初、体育館に引っ越したときは、パンとか、おにぎりとか、水が支給になったので、それで暮らしていました。

・ちょうど親の会の親御さんが、寝袋とかを持って、先に体育館の中にいました。「じゃあ、来い来い」と言われて、2カ所に広げて、一緒に固まっていた。布団とか、結構持ってきてくれていたので、すごく助かりました。ラジオも持っていました。利用者で回して、すごくよかったです。おにぎりも、行ったときは温かかったのですが、次の日は2人で一つでした。そして、だんだん冷たいおにぎりになっていきました。初めは、うちの娘も食べていましたけれども、2日目には口にしませんでした。また一晩過ごして、14日に、「グループホームの人は、もう本部に連れて帰れるようになったから帰っていいよ」と言われて、私は、その日に家族と千葉の実家に帰りました。そのとき、職員は、初めて皆さんそれぞれの家に帰れました。



・行先を間違っただけで、電気も何もついていませんでした。だけど、職員がいたので、「こういうわけなんです」と言ったら、町から連絡が行っていたみたいで、「檜葉町の方ですか」「はい、そうです」「じゃあ、今、体育館を開けますから」と開けてもらって、体育館に一番乗りでした。もちろん、それからは避難してきた方が順繰り来ました。あとは、皆さんの避難所の体験と大体一緒です。トイレの水は、プールの水をくんでいました。食べるものは、物資としてもらったものが来るけれども、時期が冬で寒いので、かちこちでした。そんなこんなで、うちの娘は嫌がって食べませんでした。そのあと、だんだん電子レンジを置いてもらえるようになり、冷たいおにぎりを温めて食べるようになり、カップ麺が届いたときは、もう本当に天国のようで、「ああ」と思いました。

・震災で、12日にいわき市に避難してきて、14日に老人ホームの施設に合流することができました。昼間は事業所のところに、夜は布団を敷いて雑魚寝する避難生活が始まりました。少ししてから、小さな一戸建てのグループホームとかを近くに探し始めました。そこで、女性はお風呂に入ったりしました。

・お風呂と洗濯が一番大変でした。体は何ともなかったのですが、食事の用意は苦になりませんでした。寒いのがちょっと。布団を取り合って掛けて寝ました。お風呂に入れなくて体に炎症が出てしまって、病院に通いました。それが一番痛かったです。

・老人施設と合流したあと、食事は毎日同じようなものでしたけれども、自衛隊でお風呂に入れてくれました。あのときは本当にうれしかったです。あと、ご飯をおにぎりにして食べていたけれども、袋麺がありましたよね。あれが、すごく温かくてよかったというのが思い出です。

・私たち夫婦は、北小の体育館に1週間ぐらいいましたが、その頃から町全体が、「会津美里町に避難しましょう」と。会津美里町と姉妹提携していたのでね。それで、美里町のほうに行きました。向こうに行ったときに、私らは別の避難所、閉鎖していた幼稚園の場所に行かせてもらいました。そこに落ちていて、自分たちの子どもたちを呼びました。

## ②家族・親族

・茨城の親戚のうちに8月の初めまでいましたが、優しくしてくれました。いつまでも迷惑をかけてはいけないので、仮設を見つけて入りました。昔よく遊びにいったところだったので、そんなに大変だとも思いませんでした。

・私のところも猫と犬がいましたが、避難所には入れません。うちは、家族で車が3台あったので、1台をペット専用にし、1台を荷物にし、1台に人間が乗りました。うちの子は酸素を吸入しているので、体育館には入れられません。ボンベも持ち出してはきましたが、切れる恐れがあります。また、緊張があると、チアノーゼを起こして心拍数が上がるので、そうなる困るじゃないですか。そのため、県内にいる妹のところ、ペットとほかの子どもたちも避難させました。そこも電気と水道がダメだったので、妹たちは子供たちを連れて、私の夫の実家に避難して10日間ぐらいいさせてもらいました。

## ③車の中

・私は薬を飲んでいるので、かかりつけの病院に行けば先生がいると思ったら、いませんでした。ほかの病院に6カ月ほど入院したことが1回あったので、そこに行けば、薬が何とかかなると思いました。その病院の近くの小学校に着いて、駐車場に、3月、4月の2カ月間、避難しました。持ち合わせは3千円くらいしかありませんでした。猫は緊張してキャットフードにあまり手を付けませんでした。とにかく、自分で何とかしなければと、犬と猫に先に魚類を全部食べさせました。それで何日か過ぎました。郵便局へ行けば下ろせたけれども、郵便局は開いていませんでした。寒かったけれども、犬と猫と一緒に布団の中で寝ていたので、何とかしのげました。うちにいても風呂には入れなかったし、車の中で寒さを我慢しました。猫が、うんちやおしっこをしないので、どうしたらいいかと困りました。出なかったら死んでしまうと思って、やっとの思いで手当てをしていたら、1週間ぐらいして、おしっこをしました。着物に引っ掛かったけれども、何とかもちこたえてくれました。

#### ④ホテル・旅館での一時避難

・避難所の体育館は、環境もよくないじゃないですか。そこから県が考えてくれて、旅館やホテルに入れるように手配を調べてくれたじゃないですか。弱い者が優先的というところもあったので、私たちは、おかげさまで会津のホテルに移らせてもらって、そこに4カ月ちょっといました。去年8月には仮設ができたということで、仮設に来させてもらいました。

### 5) 物資の調達

#### ①避難所・車中

・自分は、車に乗せて連れてきた犬の残り物を食べていたけれども、腹が減ってどうしようもありませんでした。たまたまセブン-イレブン（・ジャパン）かどこかで買い物をしたけれども、貯金は下ろせませんでした。持ち合わせはなくなってくるし、お金を貸してくれるところもありません。しかも、腹が減ってもう我慢ができなくて、「困ったな。借りられないかな」と。そのうち、郵便局で何とかあれました。役所の職員には本当に世話になりました。パンも、みんなが飽きてきたころ、持ってきてくれました。そして、残したものをみんなもらって食べていました。でも、そのうちみんな飽きてしまって、犬も飽きているからしょうがないと思いました。そうこうするうち、地域生活支援センターの所長や相談支援員に出会っていろいろ支援をしてもらって、今に至っています。

・一番困ったのは、とにかく薬を余分に持っていかなかったもので、切れてしまったことです。3日ぐらいは薬なしの状態で済ませました。そのうち、「薬のない人は言ってください」と言われました。たまたま「薬手帳」を持っていたので、飲んでいるものは全部わかっていました。そして、もらって、4日目ぐらいに、やっと飲んだという感じです。

・手持ちのお金がいくらあったので、たばこはそれで買っていました。

・私も、一番困ったのは薬です。2、3日前に医者に行って、薬を1カ月分もらってきまし

たが、これが終わったら飲むということで、それを缶に入れてしまいました。地震が起きて、それをすっかり忘れてしまって、残っていた薬だけを持って逃げました。その薬は置きっ放しで忘れていました。たまたま2、3袋持っていました。1袋だけを残して、薬がなくなってしまったので、どうにかならないかと地域生活支援センターの理事長に頼みました。その1袋の薬を見て、医者に判断してもらいました。粒はわかりましたけれども、粉薬はわからなくて、粒の薬だけをもらって飲んでつないでいました。

・水が出なかったのも、とても大変でした。

## 6) 生活再建

・合流した老人ホームはいわき市内にあります。自分たちは檜葉町と広野町から来ていますけれども、もともと、そちらにも希望の杜福祉会の施設がありました。その法人本部がいわき市にあって、そこと合流できたのが結構大きかったです。

・老人施設の下の政党事務所で、しばらく寝起きをしました。でも、お風呂と洗濯ができませんでした。ある布団で寝たり起きたりの生活でした。食事は、動けましたから、用意を手伝いました。寒かったので、100円玉を利用して、あそこのジュースを買って飲みました。あとは、運動がてらにトイレの水くみをして暮らしました。その生活をしばらくやっていて、今度はアパートを探してもらって、そのアパートに移りました。女性が5人いて、2人で一部屋を使いました。1人の方は会津のほうに行きました。ただ住んではいけないのでドーナツ屋で働いてみないかという話が出て、そこに4人で通う約束になりましたけれども、1人が入院してしまいました。それで、3人で通っていましたが、その人は、なかなか思うように病気が治らなくて、亡くなりました。3人で暮らしていましたが、ご飯だけは自分たちで炊いて、おかずはスペースけやきで作ったものを運んでもらって食べていました。そして、また分散してしまって「2対1」の暮らしになりました。今度は、ご飯を炊かないで、お弁当を作ってもらって食べていました。冷たいときはレンジで温めていました。お風呂は、一時的な間に合わせて1カ所しかなかったのも、そこを借りていました。3人で暮らして、ドーナツ屋に一応通っていました。そして、その調子でずっと暮らしてました。そして、希望者は、町で建てた今の仮設に2月末に引っ越してもいいという話が出て、その人は2月末に引っ越しました。私は、行きたくないということで1人で残って、1カ月だけ、3月いっぱい頑張っていました。レンジはありましたけれども、ガス台がないために味噌汁を作れませんでした。それで、インスタントを食べていたけれども、インスタントの味噌汁では栄養がちよっと偏って、体に影響するのではないかと考えて、ご飯を作ってくれる、今の憩いの家に移ったほうがいいのではないかとということで、希望して、私は4月5日に移りました。医者やお店、床屋に行くのに距離があつて嫌なのですが、食事がちゃんと食べられることはいいことだと思います。

・グループホームの仮設に入って、とりあえず今は落ち着いています。ストレス発散は、音楽を聞いたり本を読むことです。

・避難中に、実家のほうで知り合いがいたので、「もう帰らないで、そこの支援学校に通ったらいんじゃないの?」と言われました。でも、うちとしては、結局、次男が高校三年生だったので、帰らなくてははいけませんでした。とりあえず、4月になったら学校も始まるし、帰らなくてはいけないので、そっちには通えないということになりました。学校がいつ始まるかは、子どもと先生でやり取りをしていましたが、5月から始まることになりました。そこで、5月になったら、どっかに行かなければいけないということで、アパートを探していましたが、ちょっとありませんでした。役場に頼んだら、入れる宿があったのですが、「水道代が大変なので、各部屋ではお風呂に入れません。大浴場じゃないとだめです」と言われました。それだと、うちの娘はプールだと思って泳いでしまいます。みんなに迷惑を掛けてしまうから、1人で入るところでないとだめです。その後、塩屋崎が取れましたが、塩屋崎は海の近くだから取れたのです。でも、そこは海の本当に目の前だから、怖いのでだめだということになりました。今度は、その先の江名という所が取れました。津波が下に行って、うちは2軒ぐらいいしか残っていませんでしたが、高台にあるそこは、各部屋でお風呂に入っても大丈夫という許可をもらいました。それで、5月に帰ってきました。その時、使えるのは私の車しかなかったなので、子どもを学校に送っていました。一番下の子も養護学校に入れてもらいました。だから、子どもを高校・養護学校・大学とそれぞれに置いてというかたちで、とりあえず通っていました。まだ仕事が始まっていなかったものですから。洗濯も、洗濯機がなかったので、コインランドリーを使っていました。ですから、学校に送って行って、コインランドリーに行って、また迎えに行くという繰り返しで1日が終わっていました。

## 7) 障害児の様子

・今でもニュースで地震の速報が流れたら……。国会とか、ほかのいろんな放送も流れるけれども、字が読めないので、意味はわかりません。そういうのが出ると、「うん?大丈夫?地震?地震?」と。もう脳裏に焼き付いています。だから、その辺です。見えないところで、まだまだストレスを抱え込んでいると思います。

## 8) 事前にやっておけばよかったこと、今心がけていること

・やはり薬です。いざというときに、みんな、うまく手に入るように、あれを何とかシステムの……。自分の場合は、たまたま「薬手帳」があったからいいですけど。わからない人は、症状だけを言って、もらっていたので、そういう人は、余計に大変だっただろうと。

・うちは、家の鍵が閉まりません。うちは、ばあちゃんがいましたが、震災で避難中に亡くなりました。鍵が閉まらないもので、誰が入ってくるかわからない状態で仕事に行っているの、全財産を持ち歩いています。結局、あの日も、それをそのまま持って逃げたので、家には別に大事なものはありません。